



ルネサンス文学集

ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯 にせの
伯母さん 君主論 わが心の秘めたる戦いについて
カンツォニエーレ詩抄 パニユルジュ航海記
笑話集抄 エプタメロン抄 教皇派の中にある、福音の真理を知った信者は何をなすべきか
悩めるフランスに勧めること 自発的隷従を排す
フランス・ルネサンス名詩選 謝肉祭劇選

世界文学大系

74

筑摩書房版

世界文学大系 74

ルネサンス文学集

昭和 39 年 10 月 15 日発行

訳者代表 二 宮 敬

発行者 古 田 晁

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京4123 電話(291)局7651

目次

ラサリーリヨ・デ・トルメスの
生涯

作者 不詳
会田 由訳 5

にせの伯母さん

作者 不詳
会田 由訳 46

君主論

マキアヴェルリ
野上 素一訳 59

わが心の秘めたる戦いについて

ペトラルカ
渡辺 友市訳 110

カンツォニエーレ詩抄

ペトラルカ
池田 廉訳 180

パニユルジュ航海記

作者 不詳
渡辺 一夫訳 189

笑話集抄

デ・ペリエ
山本 顕一訳 224

エプタメロン抄

ド・ナヴァル
名取 誠一訳 240

教皇派の中にある、福音の真理
を知った信者は何をなすべきか

カルヴァン
久米 あつみ訳 253

悩めるフランスに勧めること

自発的隷従を排す

フランス・ルネサンス名詩選

クレマン・マロー

モーリス・セーヴ

ルイーズ・ラベ

ピエール・ド・ロンサール

ジョワシャン・デュ・ペレ

アグリッパ・ドービニエ

謝肉祭劇選

十六世紀の近代性

解説

カステリオン
二宮 敬訳 275

ラ・ボエシ
荒木昭太郎訳 312

秋山晴夫訳 335

川村克己訳 338

川村克己訳 342

秋山晴夫訳 344

山崎庸一郎訳 355

成瀬駒男訳 363

ザック
永野藤夫訳 371

オーゼール
二宮 敬訳 398

会田 由・野上素一
荒木昭太郎・永野藤夫 415

装幀 庫田 登

ルネサンス文学集

ラサリーリオ・デ・トルメスの生涯

作者 不詳
会 田 由 訳

まえおき

まことに際立った、おそらくはこれまで耳にしたことも、目に見たこともないことどもが、大勢の方々のお耳にはいつて、忘却の墓場に埋もれてしまわないということは、結構なことと、わたくしは思うのでございます。それと申すのも、そういうことどもをお読みあそばした方のうちには、何かたのしいと思ひになるところもございましょうし、またさして深く詮索なさらない方々にも面白いと思ひになることもあらうかと思ふからでございます。されば、プリニウスも「いかに悪い書物であろうと、何かよいところのない書物はない」と申しているのも、この辺のところを指したのでございます。

わけでも、人の好みと申すものは、すべて一様ではございません。一人が食べないものでも、他の者はそれが無性に食べたいという始末でござ

います。だからある方にとつて、取るにたならぬことがらが、他の方々には、けつしてそうではないということが見うけられるのでございす。それだからこそ、よしんば見たところ、ひどくいとわしいものでも、これを破いたり、くだらないとなげうたりしてはならない、いや、それどころか、むしろ害にならないばかりか、その中から、何かしら有益なものを引き出すことさえ出来るのですから、すべての方々に伝わってほしいものでございます。それと申すのも、さもないとして御覧なさいまし、たつた一人の人のために、ものを書く人なんぞ、いくらもございすまい。それに、何の造作もなく出来るものではなし、また、せつかく骨を折るからには、それだけの報いを得たい、と申しても、けつして金銭ではございせん、おのれの作品を、ごらんになって、読んでいただき、もしそれだけのものがあつたら、褒めていただきたいと思つてゐるのでございます。さればこそ、トゥーリウスが「名譽は芸術をつくる」と申しているのも、それを指したのでございます。

序列表の一番目に乗っている兵士というものが、生きてゆくことをいやがっているなどと誰がいったい考えるでしょうか？ いや、けつしてそんなことはございせん。それどころか、ほめられたいという欲望がその男を危険に身をさらさせるので、これは芸術や文学の世界でも同じことでございます。神学教授候補の先生と申すものは、説教がお上手で、それにまた、すべての人々の魂の向上をひとえにお望みの方で

ございます。しかしその方に、「ああ、まあ何とおみごとにあそばしたことでしよう、お上人さまは！」と、人々が申すとき、悪い気持がなさるかどうか、お訊ねになつてごらんあそばせ。何の某の殿様も、それこそ命を的に馬上試合をなすつて、道化師に鎖かたびらをお与えになりましたが、それというのも、なかなかおみことな槍さばきをなさいたねと、道化師がお褒めしたからでございました。しかしもし道化師があらひのままを申したら、殿様はどうあそばしたものでございましょう？

ところで、何ごともすべてかような次第でございす。だから、わたくしも打ちあけた話、ひとさまより聖人君子ではございせんから、かくも拙い文体で綴りましたこのよしなしごとでも、これを読んで何かお気に召す箇所を見つければ、こういう幸運や危険や逆境の中に生きてゐる男がいるということをお覧になるすべての方が、これに好意をよせて、たのしんでくださるとしたら、けつして悪い気持はいたしますまい。

どうか旦那さま、もしも技倆と希望が一致いたしてましたら、もう少しましなものを作つたかもしれない男の、この貧しい手すざびをお受けあそばすようお願いいたします。それに、旦那さまがこの件を詳細にわたつてしたため、物語れとお書きつかわされましたので、わたくしという人間の身のうえを、余すところなく知つていただくのには、話の途中からと申すより、そもそのの始りからとり上げるのがよろしいと

思われたのでございます。それにまた、生まれながらに貴い御身分の方々も、運命の神がひいきにして下さるからのもであつて、御自分の力量に負うところなぞいかに取るに足りないか、一方、運命の神にそっぽを向かれながらも、努力と才覚で漕いだおかげで、幸運の港にはいることの出来た連中が、どれだけのことを成し上げたものか、考えていただきたいからでございます。

第一話

ラーサロが身の上、何者の子であつたかを物語る。

さて、何はさておき、旦那さまに知っていたきたいことは、わたくしはトルメスのラーサロと呼ばれ、サラマンカの村、テハールス生れのトメ・ゴンサレスとアントーナ・ペレスの

一子だということでございます。わたくしの生まれたのがトルメス河のまん中だったので、そのおかげで右のような渾名がついた、という次第でございます。わたくしの父親は——どうか神様あの人をお許しなすって下さいまし——あの河の河岸にある水車の粉ひきが仕事で、およそ十五年の上、あの水車の水車番をいたしていました。そうして、ちょうどわたくしをお腹に宿していたお袋が、一夜水車小屋にいるときに産気づいて、その場でわたくしを産みおとしました。こういう次第で、まったくわたくしは、河のまん中で生まれたと申してもよろしいのでございます。

それから、わたくしが八歳の子供のころ、なんでも父親が、あそこへ粉を挽いてもらいにやってくる人々の大袋に、ふとどこにも流出口をあけて中身を失散したという罪に問われて、そのために捕えられ、かくすところなく告白して、お上のお仕置に服しました。しかし、わたくしは、父がただいま天国にいるものだ、と、神様を

おたよりにいたしております。と申すのも、そういう人々を幸いなりと、福音書（福音書）も呼んでいるからでございます。

ちょうどその頃、モーロ人に対する遠征隊が派遣されましたが、当時さきに述べました災難で追放されていた父親も、あちらへ従軍なすつた、さる騎士の荷運びらばの口取りとして、軍隊に加わりました。そうして、忠実な従僕として、御主君といつしよに一命を落としたのでございます。

後家になったお袋は、夫もなくて、よるべない身になりましたので、立派な方々のところへ身をよせて、自分もそういう立派な方々の一人になろうと思ひさだめて、市へ出て住むことになりました。そうして小さな家を一軒借りて、数人の学生たちの食事の世話を引きうけたり、マダレーナ教区の騎士団長の馬丁連の下着の洗いすすぎをしりしめたので、自然、うまやにもちよく出入りするようになったのでございます。

ところで、お袋が、馬の世話をしている男たちの一人である、黒ん坊と仲よくなったのでございます。この男はどうかすると、わたくしどもの家へやってまいって、朝方帰って行くこともありました。また時によると昼間も、卵を買いに来たなどと言って、戸口のところへやって来て、家の中へはいり込んだりいたしました。この男がやって来るようになった最初のころは、その肌の色やら、いやな顔つきだのを見て、わたくしは奴がいやでならず、恐ろしかったもの

でした。しかし、彼が来るようになって、家の食べものがよくなつて来たのに気づいて、いつかわたくしも、この男が好きになつてまいりました。何しろ、いつもパンや肉の切れを持つて来てくれるし、冬には薪をもつて来てくれるので、おかげでわたくしたちは暖をとることが出来たからでございます。

こうやって泊ったり、睦語を交したりしているうちに、お袋はわたくしに、とても可愛い黒ん坊の赤子を生んでくれました。わたくしはこの子に高い高いをしてやったり、温かくしてやるうとしたものでした。

ところで今でも覚えておりますが、ある時このわたくしの義父の黒ん坊が、赤ん坊とふざけている時、子供はお袋とわたくしは色が白いのに、父親はそうでないということに気がついたので、急にこわくなつてお袋のところへ逃げて行き、彼を指さしながら、こう申しました。

「あちゃん、お化け！」

すると、彼は笑いながら答えました。「父なし児め！」と。

わたくしは、まだほんの子供ではございましたが、わたくしの幼い弟のこの言葉が肝に銘じられて、ひとりごとを申しました。「ただ自分の姿を見ないばかりで、他の者から逃げる奴がこの世の中にはさぞかし大勢いるこつたらうよ！」

ところで運命とは申しながら、このサイド、というのが奴の名前でございますが、この男の密通が執事の耳にはいつて、探索が行なわれて、

馬に食わせるために与えられていた大麦を半分がたくすねているばかりか、その上ふすまだの薪だの、馬櫛だの、馬布だの、馬の毛布だの、掛け布だのを、なくなつたように見せかけたり、ほかに品物がないと、馬の蹄鉄まではずして、わたくしの幼い弟を育てるために、こういうものを持つては、お袋のところへ通いつめていたことが、発覚してしまつたのでございます。何しろこういう取るに足らぬ奴隷風情でも、色慾のためにはこれほど大それた勇気を起こすところを見れば、坊さんの修道士だという方が、御自分の女の信徒や、そのほかこれに類した方を援助しようと、貧乏人からもを取りあげたり、壇家からもを盗んだりなすつたにいたるところで、驚かないことにはいたしたいものでございます。

それで、わたくしが今申ししたことどころか、さらに多くのことが明白になりました。それと申すのも、わたくしはみなさんから脅かされて詰問されましたので、何しろこちらはまだ子供のことでですから、こわいばかりに、知っていることは残らず、それこそ、お袋の言いつけで鍛冶屋に売りに行つた蹄鉄のことまで、洗いざらいぶちまけて白状に及んだからでございます。

可哀そうなわたくしの義父は笞打たれた、油責めの刑に服しますし、お袋はお定まりの百叩きの刑のほかに、さきに申しあげた騎士団長のお邸の出入りを差し止められ、気の毒なサイドを家に入れることまかりならぬというお上のお裁きを受けたのでございました。

「鍋を落として綱まで失くす」ことになつてはと、お袋は悲しいながらも、氣力をふるい立たせて、宣告通りにいたしました。そこで災難を避け、うるさい人の口からのがれようと、その頃ラ・ソラーナという宿屋に投宿していた人々へ奉公に行きました。そうやって、ここで、数数の苦勞をしながら、ようやく弟も歩けるようになり、わたくしもひとかどの少年になって、泊り客の言いつけで、ぶどう酒だのろうそくだの、そのほかいろんな使い走りしたりするまでに育てあげたのでございました。

ちょうどその頃、たまたまこの宿に、一人の盲人が投宿にやつてまいりまして、これがわたくしを手引きにもつてこいと考へて、お袋にわたくしをくれと申しこみますと、お袋も、この子はキリスト教の宣揚のために、ロス・ヘルベス島の役で戦死をとげた、まともな男の息子だといふ次第を物語り、さらによもや父親に劣るような人間になることはあるまいと、かたく神様を信頼申しあげている、それにこの子は父親のない子なのだから、くれぐれも大切に扱つて、何くれと面倒を見てくれるようにと云つて、わたくしを彼の手にゆだねたのでございます。

彼のほうでも、きつとその通りにしよう、それに引きとるにしても、従僕としてではない、実の子供として引き受けようと思ひました。で、こういう次第で、わたくしはこのわたくしの新しい、しかも年老いた主人にかしずき、手引き役をつとめることになりました。

わたくしたちはいく日かサラマンカにいたの

ですが、どうやら満足のゆくような儲けもなさそうだったので、わたくしの主人はこの土地を立ち去る決心をいたしました。そして、いよいよ出発しようという時になると、わたくしはお袋に会いに出かけましたが、二人とも涙にくれながらも、お袋はわたくしを祝福してくれて、こう申しました。

「倅や、もう二度と再び、お前に会えないことは、あたしにもよくわかつているんだよ。いいかい、正直な人間になるようにとめて、そうやって神様に導いていただくのだよ。お前はこれまでわたしが育てて来たのだし、いい御主人を見つけてやったんだ。これからはせいぜい自分の力でやってゆくんだよ」と。

こうして、わたくしは、わたくしを待っていてくれた主人のところへ帰ってまいりました。わたくしたちがサラムンカを出て、ちょうど橋のところへさしかかると、その橋の渡り口のところに、どうやら牡牛の形をした石の動物像がありました。すると言はわたくしにその動物像のそばへ行けと命じ、わたくしがそこへ行くと、こう申しました。

「おい、ラーサロ、この牛に耳をあてて見な、中でどれくらい音が聞こえるから」

そこで、わたくしは、ごく無邪気に、そうかなと思って耳を近づけました。すると、奴はわたくしがいいよ石のそばに頭を持っていたなと感じると、手にぐいと力をこめて、その牛の畜生に向かって、わたくしの頭をがあと一つ、思いきりぶっつけたものです。おかげで

それから三日の上も、その頭突きが痛みつづけたほでしたが、それでわたくしにこう言ったのです。

「馬鹿野郎、覚えておくがいい。盲の手引き小僧つてものは、悪魔よりかちよつとばかり利口でなくっちゃならんのだぞ」

そうして、この冗談を大いに笑ったものでございます。

これまで子供のように眠りこんでいた無邪気さから、わたくしははじめて目を覚ましたのは、正にあの瞬間だったように、わたくしには思われました。

そこでわたくしはひそかに、心の中で申しました。

「こいつの言うのは本当のことだ。つまりおれは、目を見開いて、何ごとにもよく気を配っていることだ。何をいうにもおれは一人ぼっちなんだからな、だから自分でどうやっていったらいいかも考えることだ」

それからわたくしたちは旅路にのぼりましたが、そのほんの数日のあいだに、奴はわたくしに、隠語を教えてくれました。そうして、わたくしがなかなか利口なことを知って、ひどく喜んで、こう申しました。

「わしは、金とか銀とかいうものは、お前にやることは出来ないがね、しかし生きるうえに必要な知恵なら、いくらでも貴様に教えてやろう」

これはまったくその通りでございました。この男は神様についてわたくしに生活というものの

を与えてくれ、盲でありながら、わたくしの目を開いてくれ、人生行路の手引きをしてくれたのですから。

わたくしが旦那さまに、こういうくだらないことを、得意になってお話し申しますのも、低い身分のものどもが上に浮かびあがれるということが、いかほど結構なことで、一方、高い身分の方々が、いつか卑しい身分に落ちておしまいになると申すことが、いかほどいけないことかをお教えたいたしからでございます。

さてわたくしの親切な盲人のことに帰って、彼のくさぐさのことをお話しいたしますと、神様がこの世の中をお創りあそばして以来、これはどまて奸智にたけ、これほどまで機敏な男は一人としておつくりあそばしたことはないというのを、旦那さまに知っていただきたいと存じます。何しる仕事にかけては驚みたくない男でございました。お祈りは百通りの上もそらで覚えていた。低い、ゆつたりした、そのくせひどく響きのいい声で、奴が唱えていると、教会じゆうを響きわたらせたもので、それに唱えている時の様子がまた、実におだやかなもので、いかにも殊勝げな、敬虔な顔つきをして、ほかの連中がよくやるように、口や眼をゆがめて、しかめ面をしたり、へんてこな顔をするようなことはございません。

それに加えて、お金をつくり出す手段や方法を数かぎりなく身につけていました。お祈りにしても、子供の出来ない女のためのだとか、妊婦のためのだとか、不幸な結婚をした女を亭主

が愛するようになるためのだとか、数かぎりない、いろんな効き目のある祈禱を知っていると自分でよく申しております。妊婦に向かつて、今度生まれる子供が、男の子か女の子かという占いもやつたものでございます。

そんなわけで、医術ということになると、齒痛、失神、女の血の道などでは、いにしえのガレノスも、わしの半分も知っちゃいなかったと、常々申していました。つまるところ、彼にどこそこが悪いとうったえて、即座にこう彼から答えてもらわなかった者は一人もございませんでした。

「こうさつしやい、ああさつしやい。これこれの草を摘まっしやい。こういう木の根を掘らっしやい」と。

こういうふうですから、どこへいっても、誰もかれも彼のとを追っかけまわしましたが、中でも女連はたいへんで、彼のいうことなら、一から十まで信じこむありさまでした。だからこういう女連から、今申しあげたすばらしい腕前で、どえらいみいりをせしめたもので、百人も盲人がたばになって一年かせぐよりも、この男のひと月のかせぎのほうが多いくらいでございました。

それにしても、これほど稼いで、相当握っているくせに、まずこのくらい欲のふかい、しみつたれな男は、ついぞこれまで見たことがなかったというこゝも、旦那さまに知っていたのだきといと存じます。何しろそれはわたくしを、今にも飢え死にさせんばかりのすさまじさで、事

実、必要なものの半分もろくろく食べさせてはくれませんでした。まったくの話でございすよ。これでわたくしが、持ち前の早業と、巧みな策略で、埋め合せをつけることが出来なかったら、これまで幾度空腹であえなくなっていたかわかりません。しかし、あの男のすばらしい知恵と抜目なさにもかかわらず、いつでも、いや多くの場合、わたくしの分け前がたくさん、しかもいちばんいいものになるような具合に、彼の裏をかいてやつたものでございます。そのためには、彼に対して、ずいぶん性の悪いわるさもやつたものでございますが、その中のいくつかを、これからお話し申しましよう。もっとも全部が全部、痛い目も見すうまくいったわけではございませんが。

いつも彼はパンやそのほか一切合財を、麻布の頭陀袋にいれて持ち運んでいましたが、それは南京錠と鍵のついた鉄のしめがねで袋の口を締めてありました。ところで、いざ全財産を出し入れするといったときには、たいへんな警戒ぶりです、一つずつしか出し入れしないという用心ぶかでしたから、よしんば世界中のどんな男がかかっても、そこらパン屑ひとつつくすねることも出来ないくらいでございました。しかし、わたくしは彼が与えてくれる、あのごくわずかなものを食べていたのですが、これがせいぜいふた口足らずで、あっけなく片づいたものでした。

彼が南京錠をかけおわって、わたくしは何かほかのことに気をとられているんだらうと思っ

て、すっかり気をゆるしている時、これまで幾度も糸をほいては、また元のように縫いなおした頭陀袋の片がわの、わずかばかりの縫い目から、パンも小さきさみに取り出すどころか、でっかいパン切れ、揚げた塩豚、腸づめなどを取り出しては、この強欲な頭陀袋から抜きとったものでした。こうやってわたくしは、球戯の球の打ち返しじゃなくって、この悪者の盲人めがわたくしにすかせつばなしにした、地獄さたのすきつ腹の埋め合せをつける好機をねらっていたのでございました。

ところで、わたくしは何とかしてちよろまかしたり、盗んだりしたものを、残らず半ブランド銅貨に換えて持ち歩いていましたが、みなさんが彼にお祈りをお頼みになって、ブランド銅貨でお礼をなさるとき、相手は目が見えないというのに、その銅貨をそぶりででもあらかじめ知らせてお渡しになる方は一人としてございませんでした。そのときわたくしは、その銅貨を口の中へほうりこみましたが、口の中には半ブランド銅貨をちゃんと用意しておきましたから、いくら彼が素早く手をさし出したところで、もうこの時は、わたくしの両替のおかげで、それは元の値段の半額になっていたのでございます。そこで盲人の悪党は、手ざわりで、そいつがまるまるの一ブランド銅貨ではないと、すぐさま感じとったものだから、わたくしに向かつて、ぶつくさ不平を鳴らしたものでございました。「ちくしょう、こりゃいったいなんてこった、貴様がわしといっしょにいるようになってから

つても、半ブランカ銅貨しかくれやしねえ。先にヤブランカ銅貨だ、マラベディ銀貨だと、ちよいちよい払ってくれたもんだ。このしけはどうあつても貴様のせいにながらないわい」と。そこで彼のほうでもお祈りをちぢめたい、祈禱の文句の半分も唱え終わらないこともあるようになりまして。それというのが、お祈りの頼み主が行つてしまふが早いか、彼の長外套のしを引っぱるやうに、わたくしにちゃんと言いつけておいたからでございます。もちろん、わたくしはその通りにいたしました。すると彼は再び声をはりあげて、こう申すのでした。

「さあさあ、お望みしだい、ご祈禱の注文はありませんか？」と、よくこういう連中が申すやうにです。

わたくしたちが食事をするときには、彼はきまつてぶどう酒の壺を自分のすぐ近くに置いたものでございますが、わたくしは目にもとまらぬ早わざでそいつを引きよせて、音を立てないで二、三回それに口づけしては、元の場所へもどしておきました。しかし、これも永くは続きませんでした。というのが、ぐびりぐびり飲むうちに酒の不足に気づいたので、自分の酒を完全に保存しようというところから、その時以来、決して壺を放置しなくなつたどころか、壺の取っ手をずっと握りしめに行っているのでございます。しかしいくら磁石でも、わたくしがその目的でこしらえておいた、ライ麦の長い茎でやつたようには、ものを自分の方へ引きつけることは出来るものではございません。そいつを壺

の口へ差しこんで、ぶどう酒をちゅうちゅう吸つて、相手を途方にくれさせたのでございますから。しかし何といつても相手はあの通りの抜目のない不逞な奴ですから、こっちのやり口を感づいたものと見えて、それからこっちは、すっかり遣り口を変え、壺を両脚のあいだにすえて、おまけに片手で壺のふたをして、こうやつてゆうゆうと飲んでいたものでした。

ところで、ごつちはいつか酒を飲みおぼえてしまひ、無性に飲みたくて仕方なかつたのです。が、しかもあの麦蘖の方法も、今となつては何の役にもたないといわかつたものですから、壺の底に小さな飲み口の小孔をあけて、これをごく薄い蠟のかたまりで、巧みにふさいでおこうと思ひつきました。そうしていよいよ食事時になると、寒くて仕方がないようなふりをして、わたくしたちが焚いた、貧弱なたき火に温まろうと、このしがない盲人の両脚の間に這いこんだものでございます。すると間もなく、火の熱気で、ごく少量だつただけに蠟が溶けて来て、例の小さな泉がわたくしの口の中へしたたり始めましたが、その滴が一滴もなくなくなつてしまふまで、わたくしは口をあてがうていたのでございまして。だから、この気の毒な男が、いざ飲もうとした時には、もう何にもございませんでした。

彼は驚きあわてて、自分自身を呪ふやら、壺とぶどう酒を悪魔のせいにしてけなすやらで、いったいどうなっているかも分らないでいたらくでございました。

「おじさん、おいらが飲んだなんて言っちゃいけないよ」とわたくしは申しました。「だつて、あんたはそいつから手を離さないのだからね」何度も何度も壺をぐるぐるで回したり、さわつて見たりして、ついに例の飲み口を見つけ出し、こつちのいたずらを読みたつたのですが、そのくせまるつきりそれには気がつかかなかつたかのように白ばつていました。

さて、その翌日のこと、わたくしがいつものやうに、わたくしの壺から少しづつ酒をしたたらせながら、わが身のうえに仕組まれている災難のことも、まして盲の悪党がわたくしの仕業を感づいていることも、てんで思ひ浮かべもしないで、顔を仰向けにして、おいしい液体の風味を心ゆくまで味わおうと、目を細めて、あの方醇なひと口、ひと口を頂戴しながら、いつものやうに坐つていたのでございます。すると、むかつ腹を立てた旨め、かたきを討つのはこの時と見てとつて、全身の力をこめて、この甘味な、同時に苦々しい壺を両手でさし上げると、今申しましたやうに、これに全身の力をこめて、わたくしの口のうへへ落つことしたものでした。何しろ、哀れなラーサロめは、こんなことがあろうなどとは、ついぞ思つてもいなかったどころか、これまでの時と同様に、すっかり油断して、うっとりといひ心持になつていたのですから、まったくのはなし、この時は大空が、大空にある一切合財もろともに、わたくしのうへへ落ちかかつて来たかとも、思われたほどでございました。

このちよいとした打撃がなかなかやさしいものではなかったので、気が遠くなって失神したほどでしたが、おまけに壺の当たり方はげしかったことといったら、粉々に碎けた破片がまともに顔にぶつかって、ところどころ傷つけられるわ、前歯は折れるわで、おかげで今日にいたるまで、歯っかけになつてしまひました。あの時以来、わたくしはこの悪者の盲がきらいになりました。なるほど、あの男はわたくしを愛してくれ、いたわってくれ、面倒を見てはくれましたけれど、あの男がこの残酷きまる折檻を大いに興がっていたと申すことを、この目でしかと見てとつたからでございます。彼は壺の破片で、わたくしに加えた裂傷を、ぶどう酒で洗ってくれ、にやにやほくそ笑みながら申しました。

「どう思うかね、ラーサロ。お前を傷つけたぶどう酒が、今度はお前を直して、元どおりのからだにするんだからな」

そのほかいろいろと冗談を申しましたが、わたくしにはいっこうに冗談には思えませんでした。

さて、このあさましい傷や紫色のあざが、半分がたなおけるやいなや、こういう手ひどい打撃をもう少し加えて、この残酷な盲めはいつなんどぎ、わたくしをおさらばにしないものでもないと考えましたので、いっそのこと、こちのほうでこの男から、おさらばしてやれという気になりました。もっとも、どうせやらかすなら、こちの身はつつがなく、おまけに損

をしないようにやつつけようと、それほど事を急がなかったのでございます。むしろわたくしはやる心を取りしずめて、この壺なぐりの件さえ目をつぶつてやろうと思つたのですが、何の原因も理由もないのに、やたらとわたくしの頭をなぐったり、髪の毛を引っこ抜いたりして、わたくしを痛めつけるといふように、あれからこち、この盲の悪者がわたくしに加えたひどい仕打ちでは、しよせんそういう余地はございませんでした。

そこで、もし誰かがどういうわけでその子をとんなにひどくいじめるんだねと、彼にたずねると、さっそく彼はこういう前置きをして、例の壺の話をして聞かせるのでした。

「わしのこの小僧がいくらかでも無邪気だなんてお思ひになりますでしょうかね？ それじゃ話を聞いてくださいよ、よしんば悪魔だつて、こういう大それたことをやって見る勇氣があるかどうかをね」

彼の話を聞いた人々は、十字を切りながらこう申したのでございます。

「どうだい見ろよ、こんな小さい小僧っ子のくせに、そんなことをやらかそうなんて、誰だつて考えるものかね！」と。

それから例の策略のことをさんざん笑つたあげく、口をそろえて人々は彼に申しました。「こいつに罰を加えないさいよ、罰しておやんないさいよ。さもないと、あんたが神様から罰を受けますよ」

それに、彼もやはりこのことでは、罰を加え

る以外のことは決していちしませんでした。

そんなわけで、わたくしは奴をひどい目に会わせてやろうと、いつも、しかも故意に、なるべく悪い道を連れて歩かせたものでした。石がごろごろしていればその石ころ道を、ぬかるみがあれば、なるべくいちばん深いぬかるみをといてふらに歩いて。もつともわたくし自身も、決して特別に乾燥したところばかり歩いてたわけではありませんでしたが、しかしわたくしは、相手の目を二つつぶすためになら、と申しても相手は両眼のない男ではございましたけれど、喜んで自分の目をつつつぶしたにちがひありませんでした。こんなところから、彼はしよつちゆう、さぐり杖の石突きでわたくしの後頭部に探りを入れて小突くものですから、おかげでそこはいつも瘤だらけ、おまけに彼の手で毛をむしり取られていました。それに、いくらかわたくしが、これは悪意があつてやつたことじゃない、もつといい道が見つからないからだと言つてもわたくしに好意をよせるところか、てんで信じてもくれませんでした。まづたこのしたたか者の勘のよさと、頭のすばらしいことは、ざつとこんなものでございました。

そこで、この悪がしこい盲人の知恵がどのくらいいますばらしいものだったか、旦那さまに納得していただくために、わたくしが彼といっしよの頃出会わしたたきさんの出来事の中から一つだけお話し申しましよう。それというのも、その出来事の中には、彼の並はずれた狡猾な面目を如実に伝えていると思われるからでございます。

ます。わたくしどもがサラマンカを出発いたしました時、彼の目指すところはトレードの地へまいろうというのでございました。何でもあそこの人々はあまり施し好きではないが、ずっとお金持だという話だったからでございました。

つまり「情け深い文なしより、財布のひもの固い金持」ということわざを頼りにしていたのでした。そうして、われわれはなかなか結構な村を通して、この道中を続けました。喜んで迎えてくれ、お貰いもたくさんあるところでは逗留しましたし、そうでないところでは、三日目には、われわれはサン・フワンの日の召使よろしく、さつさとおいとまいたしました。

ちようどぶどうを獲り入れている時期に、アルモロックスという村へさしかかった時、たままぶどう摘みの一人の男が、ぶどうのひと房を彼に施してくれました。ところで、何しろぶどうの籠というものは、とかく乱暴に扱われるものだし、それにかえて加えて、その時期のぶどうはすっかり熟してしまいましたので、房は彼の手の中でたままばらばらに離れてしまいました。それを頭陀袋の中へ入れようものなら、たちまちぶどう汁になってしまつて、これが頭陀袋にべとべとへばりつくこと請合ひでした。

そこで彼は一つ大ぶるまいをやることに決めましたが、それは持つて行くことが出来なかつたからでもあれば、わたくしを喜ばしてやりたかつたからでもございました。それというのも、その日さんさんにわたくしをひざがしらで突きめしたり、なぐつたりいたしたからでした。

さてわれわれが柵に腰をおろすと、彼が申しました。

「さあこれから貴様と無礼講でやることにしよう。つまり、このぶどうの房を二人で食べることにするが、貴様もおれと同じだけ食べてもよいということよ。こいつをこいうふうに分けるとしよう。貴様が一度つまむ、するとおれが一度つまむ。ただし決して一度に一つづしか取らんと約束をするならばだ。おれもおしまになるまで、その通りにしよう、こうやったらごまかしも起こらないだろうよ」

こいう具合に協定が成立すると、わたくしたちは食べはじめました。しかし早くも、二回目の攻撃に、この裏切り者は方針を変えて、きつとわたくしもその通りにやるにちがいないと思つたのですから、二つずつ食べ始めました。わたくしは、彼が契約を破つたのを見たもので、すから、相手に歩調を合わせるだけでは満足できなくなりました。いやそれどころか、その先をとりました。つまり、二つずつ、三つずつ、食べられるだけ食べつづけたのです。やがて房がおしまいになると、しばらく彼は空になつたぶどうの柄を手にしていました、やがて頭をうねると、こう申しました。

「ラーサロ、貴様おれを欺したな。貴様がぶどうを三つずつ三つずつ食つたことは、おれは神様に誓つてもいいぞ」

「食べやしませんよ」と、わたくしは申しました。「しかし、どうしてそんなことを疑うんです？」

すると、この才氣煥^{かんと}発たる盲人が答えました。「貴様が三つずつ食べたことを、何でもおれが覺^きつたかわかるかね？　つまり、おれが二つずつ食つていたのに、貴様が黙つていたからさ」

わたくしはひそかに笑いました。そして、子供ながらも、この盲の抜目のない思慮深さに、ひどく感銘したものでございます。

しかし、あまり冗漫にわたらないように、わたくしがこの最初の主人といつしよにいたときに起こつた、愉快なばかりか、傾聴に価するたくさんのお出来事を述べることは割愛するとして、彼との別れのいきさつを申しあげて、彼のことはこれでおしまいにいたしたいと存じます。

ちようどその頃わたくしたちは、同名の公爵さまの御城下エスカローナの、とある宿屋にいたのでございますが、主人はわたくしに、火にあぶるようにと、腸詰をひとつ渡しました。いよいよ腸詰から脂がポタポタとにじみ出して来て、その脂でこんがり焼けたパンの切れを食べましょうと、彼は財布から一マラベディの銅貨を取り出して、わたくしにこのお金だけのぶどう酒を居酒屋へ買いに行つてこいと言ひつづめた。このとき、そらよく世間で申すじやございませぬか、「機会は泥棒をつくる」つて、その機会をわたくしの目の前に悪魔の奴が置いてくれました。というのが、小さくて、長つ細い、貧弱な、おまけにとでも煮込み料理には使えそうにもないんで、そこへうち捨てられたものに違いないというやうな、大根が一本、火のそば

にあったという次第でございます。

それに、その時は彼とわたくし二人を除いては誰一人いませんでしたし、おまけに、腸詰のうまさうな匂いに食いをそそられて、のどから手が出るくらいに食欲を覚え、どんなことになるかなどという前後の考えもなく、ただ何としてもこの食欲を満たさねばならぬという一念にかられていましたから、この欲望を満たそうと、あらゆる危惧をはいのけて、ちょうど盲が財布からお金を出しているすきに、わたくしは腸詰を抜きとって、そのかわりに先にお話しした大根をすばやく鉄串にさしました。わたくしの主人は、ぶどう酒の代金をわたくしに渡すと、鉄串を手に取りあげ、この数々の長所のおかげで、これまで煮たり焼いたりされずに来た例のしろものを串焼きにしようと、火にあててぐるぐる回しはじめたものでございました。

わたくしはぶどう酒を買いに出かけましたが、それと同時に腸詰を片づけるのに手間どりはいたしませんでした。そこでわたくしが帰ってまいりました時は、ちょうど罰あたり目の盲めが、二切れのパンの間にはさんだ大根を手にしていて、ところでしたが、まだ手でさわって見なかったもので、いっこうにそれと気づいてはいなかったのです。でございます。いよいよ二切れのパンを取らあげ、それにかじりついても、やはりその中に腸詰の一部分がはいっているものと考えていただけに、冷えきった大根にぶつかって、思わず冷たさにひやりとしたのでした。彼はあわをくって申しました。

「こりやいったい、何だ、ラサリーリヨ？」

「おいちも苦勞するよ！」と、わたくしは申しました。「また何かおいらのせいにしていうつていうんですね？ おいらは、たつた今ぶどう酒をとって帰って来たところじゃありませんか？ 誰かそこにおいて、冗談にこんなことをやつたに違いありませんよ」

「いやそんなことはない」と、彼が申しました。「わしはずつと鉄串から手を離さなかったんだから、そんなはずはない」

わたくしは今度のすりかえの件は身に覚えがないとくり返し誓い、またにせの誓いを立てましたが、何のききめもありませんでした。何しろこのいまましい盲の狡猾さにあつては、かくしごとなど何ひとつ出来なかったからでございます。彼は立ちあがると、わたくしの頭をし

つかととらえ、わたくしの臭いをかこうと身をすりよせてまわりました。おそろく、俊敏な獵犬か何ぞのやうに、わたくしの息のにおいを嗅ぎつけたからでございます。かくしごと、真実をはつきり突きとめようと、内心の焦慮にせき立てられて、両手でわたくしをしつかと捕え、むりやり口をおし開き、無作法にも奴の鼻をつつこんだのでございます。この鼻は、もともと、長くとんがっていたのですが、何しろあの時は、かんかに怒っていましたので、一パルモがたは寸法がのびていました。彼はこの鼻の先端を、わたくしの食道の入口までとどかせました。

ところで、このことと、わたくしがそのとき抱いた恐怖と、いくらか時間がたつていなかっ

たので、例のろくでもない腸詰が、まだ胃ぶくろにしつかとおさまつていなかったこと、いやそんなことより、最も肝腎なことは、ほとんど半分までわたくしの息の根をとめようとした、あの円満具足の鼻に不意打ちをくらつたことだったのですが、こういうすべてのことがいっしよになり、これが悪事とごちそうをさらけ出し、持物はもとの持主へ返されるという原因になつたのでございます。そこで、盲の悪党がわたくしの口から、ラッパのやうなでか鼻を引き抜きもしないうちに、わたくしの胃袋は大恐慌を来したものですから、盗んだものをこのでか鼻にぶつけたものです。そこで、奴の鼻とろくすっぽ噛みもしなかつたいいまましい腸詰とが、一時にわたくしの口からとび出したのでございました。

おお、全能の神様、あの時お墓へ埋められていたら、どれだけ仕合せだったことでございましょう。それと申すのも、わたくしはとうに死んで、埋められていたにちがいないからでございます！ その時のこの根性曲りの盲の腹立ちはずさまじいものでしたから、もし物音を聞きつけて人々が駆けつけてくれなかったなら、おそらくわたくしを、このまま生かしてはおかなかったらうと、今になって思うのでございます。人々は彼の両手の間からわたくしを引きはなしてくれましたが、その時奴の手の中には、わたくしのなけなしの髪の毛がしこたま残りましたし、顔は引つかれる、ぼんのくぼんのどはかきむしられるていたらくでした。しかし、何を

いうにもわたくしのどの悪事から、こういう痛い目にも会ったのですから、これもまた自業自得だったのでございます。

この旨の悪党はその場へやって来た人々に残らず、わたくしの失敗の数々を物語りました。そうしてあるいは酒壺の件、あるいはぶどうの房の件、さてはさっきの件と、あの時この時と人々に説明したのでございます。ところで、みんなの笑い声があんまり大きかったので、おそれから道を通りかかった人々も残らず、このにぎやかな騒ぎを見ようといつてまいりました。それにしても、旨がわたくしの数々の武勇伝を、面白おかしく言葉たくみに、繰り返し話すものですから、わたくしはあれほど痛めつけられ、まだ泣きやんではいなかったのですが、彼の話を笑ってやらなければ、何か悪いことをしているような気がいたしました。

さて、この出来事が一段落ついたとたんに、あの男からあびせられた悪口雑言のせいで、つい自分で犯してしまった卑怯と弱気のふるまいが、わたくしの記憶にのみがえて来ました。それはあいつを鼻かけ男にしてしまわなかったというところでございました。なぜならそれは時間も十二分にあったし、それに道の半ばですすでに到達していたのでございます。と申すのも、ただちよいと齒をかみしめただけで、それは自家薬籠中のものになっていたに違いないからでございます。それにいくらあの人非人の持物だからといって、おそろくわたくしの胃袋も、腸詰をしまいこんだ時よりさらにしっかりと

こいつをしまいこんだことでしょ、それに鼻が外へ現われてこないかぎり、いくら返せと請求されても、ことわる事が出来たに違いございませぬ。こいつさえやっていたら、どんなに神様の思召しにかなったこととございませうし、そうやったところで、どうってこともなかったろうじゃございせんか！

宿のおかみさん始め、その場に居合わせた人々が、わたくしたちの間を丸くおさめて、主人の飲みしろにわたくしが買ってまいったぶどう酒で、わたくしの顔やのどを洗ってくれましたが、それに向かって悪者の旨は冗談半分の毒舌をあびせかけました。

「本当によ、この小僧と来たひにや、ぶどう酒を一年のうちに、おれが二年かかって飲むより、傷洗いに使いやがる。なあ、ラーサロ、貴様は少なくとも、生みの父親よりも、ぶどう酒の恩になつてゐるぞ。そりや父親は一べんだけ貴様をこの世の中へ生んでくれたかも知れんが、ぶどう酒ときたら、千べんも貴様のいのちを助けてくれたんだからな」

それから彼はこれまで何回となく、わたくしの頭をたたき割つたり顔をかきむしつたりしては、ぶどう酒で、たちまちなおしてやつたんだということを物語つたものでした。

「わしが貴様に言いたいことはだね」と、彼が申しました。「もし世の中に酒さえありや、めでたしめでたししてやつがいたら、そいつは貴様だろうよ」

これでどつとばかり笑い出しました。もつともわたくしが思いきり悪態をつきはいしたしたけれど。けれども、この旨の予言は決してでたらめにはなりませんでしたから、あれからこつちは幾度となくあの男を思い出すのでございませう。彼は疑いもなく、予言の靈感をそなえていたに違いありません。だから、あの日彼がわたくしに申したことが、いずれ先へ行って旦那さまもお聞きあそばすように、まったくわが身の中いたしたことを考えますと、そりやなるほどこちらもしつぱい返しを食つて、つぐないをいたしましたものの、わたくしが彼に対して行なつた数々の悪ふざけが、今さらながらくやまれるのでございます。

今度のことや、これまで旨がわたくしを愚弄したあくどいからかいようななどを考えたあげく、わたくしはきつぱりと彼から離れようと決心いたしました。これはかねて考え続けていたことでもあれば、きつとそうしようときめていたことなので、今度彼がわたくしにしかけて来た最後の悪ふざけによつて、さらにそうしようとした意のほぞを固めたのでございました。

そして次のようなことになつたのでした。さてその翌日のこと、わたくしどもは町へ物乞いに出かけましたが、その前夜はたいへんな雨降りだったのでございました。ところが、その日も雨が降っていましたので、その町のあちこちにある軒下道を、祈禱を誦しながら歩いていました。そこなら二人とも濡れないですんだのです。しかし夜になつても、雨が降り止まない